



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

「勉強を教わった先生」

著者	長谷川 哲子
雑誌名	エコノフォーラム21 : 学生と教職員のインターコミュニケーション誌
号	25
ページ	33-33
発行年	2019-03-14
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027833

20代 あの時私は……研究と青春

「勉強を教わった先生」



長谷川哲子

研究に没頭していた20代、それと今の自分とのつながりを、というお題をいただいたものの、自分の過ごした20代は研究とはどのようなことか分からなかったし、いまも本当は分かっていないし、大学生活の中で覚えていることを……と独り決めしてみた。際立っていまも残る記憶を書くこととお許しただければと思う。

学部生として教えを受けた先生のうち、忘れ得ない先生のことである。いまなお新刊本コーナーでお名前を拝見する先生でもあり、多少のフィクションを交える。

まずは授業には遅れていらつしやる（授業開始時間から28分後、絶妙なタイミング）。仕事場は某駅前の喫茶店、家には帰れないから、というような話を枕に、おすめの本の

話が始まる。毎回3冊。古今東西を問わず縦横無尽に語ること数十分ののち、おもむろにテキストを1／2ページほど解説し、もう時間やな、と教室を去る。豊かに紹介された数十冊のうち、ごくわずかしか手にとらず興味を持とうとしなかったことが今でも悔やまれる。

しかし、言いたいのはそのことではない。当時は、専攻科目を一つでも落とすと1回生でも即留年、1年生を何回でもどうぞ、という学科だった（そこで「1年3回生」というような用語法とその実在を知り、心底おびえることになる）。夏休み前の最後の授業で、夏休み明けにテストをするとして、課題が出された。夏休みに勉強用のノートを作り、9月の初回授業に乗り込んだ。いつもどおり、授業には遅れていらつ

しゃった（授業開始時間から28分後、絶妙なタイミング）。（以下同じ）。そしてテストはなかった。教室を後にする先生のもとへ、これだけがんばったのにとノートをひらいて見せんばかりに詰め寄った。いま思えば愚かである。そして肩すかしを食らった。いま思えばおっしゃる通りなのである。「ええやないか」。

本、ちゃんと読んだんやろ？ おお、よかった勉強したんやろ？ おお、よかったやないか！ この言葉を咀嚼できたのは、先生と同じく大学教員の職に就いてからである。どうしても合格したい奨学金の応募書類がそろわず廊下でうろたえていたところ、ほかの授業よりもきみの将来のほうがよくの授業より大事やからな、とウィンクが聞こえそうな笑顔で、授業に出ず事務室に行けと言ってくれた。その

恩もさることながら、いま少し書いておきたい。先生の授業は、立ち見が出るほどだった。多くの話なんか聞いているより、図書館で本90分読んでいるほうがずっと勉強になんのになあ……とくり返しばやかれても教室を出ていかない学生に苦笑しつつ、学生の知らない、そして知るべき世界への扉を目前にひらいてくださっていた。いまだ報いることのできない学恩である。

大学教員としての自分について考えさせられるときには、この先生のことをおもう。